百宅の開基

清流に揺らぐ梅花藻

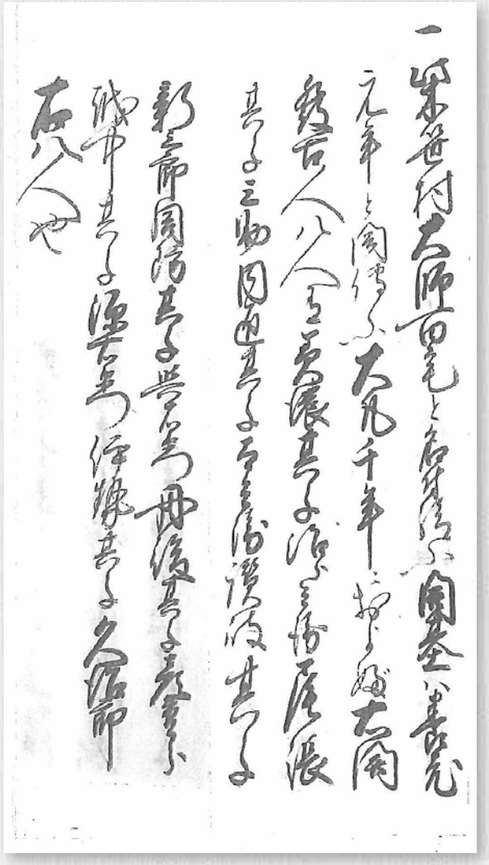
百宅の開基

1. 古文書「御領分中覚書」の記録

百宅のはじまりは平家の落人伝説や全国諸国からの修験者が定住したとする説がありますが、いずれも根拠は不明です。

百宅の開基を記述する江戸時代の古文書「御領分中覚書」（宝暦6年（1756年）矢島藩高柳安左衛門が藩主の名代として領内を巡視、金子・小助川両家老同行、その時の資料として郷内の状況を書留めた文書）が残されております。そこには次のように記述されております。

柴笹村大師百宅と名付給ふ。開基は養老元年（717年）と聞き給う。大凡千年におよぶ。右開発古人八人有。美濃其子治郎兵衛、尾張其子三助、内匠其子太兵衛、讃岐其子新三郎、周防其子与衛門、丹後其子彦十郎、越中其子源右衛門、伊勢其子久治郎、右八人也。



「御領分中覚書」 宝暦6年（1756年）

これまで「御領分中覚書」に記述されている百宅の開基については信憑性に疑問が持たれていました。その理由としては①同書には疑わしい記述も多く記録されていること、②百宅が開基されたとする養老元年（717年）から千年以上も経過した宝暦6年（1756年）の記録であること、③全国から来た8人によって開基されたとする言い伝えは常識的にあり得ないこと、などが考えられます。

しかし、このころの時代背景を考えると、大和朝廷が越後から勢力を拡大するため北上し、出羽国（現山形県酒田市）を建国した時期にあたります。【資料−1】に示すとおり、和銅元年（708年）出羽郡新設、和銅5年（712年）出羽国建国、和銅7年（714年）諸国から出羽国に柵戸200戸移配、霊亀2年（716年）諸国から出羽国に柵戸400戸移配、養老元年（717年）百宅が諸国出身者8人により開基、養老3年（719年）諸国から出羽国に柵戸200戸移配、などとなっており、出羽国に移配された柵戸の一部が百宅を開基したと考えてもおかしくありません。むしろ、そのように考えるのが当然の流れではないでしょうか。

【資料−1】出羽国創建当時の主な出来事

西暦（年）	和暦	主な出来事	文献・出典	記事
708	和銅元年	出羽郡新設	「続日本記」	
709	和銅2年	征狄所（出羽柵）に100隻の船を集結	「続日本記」	
712	和銅5年	出羽国建国	「続日本記」	出羽国府は城輪柵とするのが定説。当初、出羽・置賜・最上の3郡で建国され、後に田川・飽海・川辺・秋田・雄勝・平鹿・山本の各郡が建郡されたとする説がある。
714	和銅7年	東海・東山・北陸道の諸国から出羽国に柵戸200戸を移配	「続日本記」	
716	霊亀2年	東海・東山・北陸道の諸国から出羽国に柵戸400戸を移配	「続日本記」	
717	養老元年	百宅が全国の諸国出身者8人により開基されたとの言い伝え	宝暦六年（1756年）矢島藩「御領分覚書」（高橋健家文書）	「御領分覚書」は1000年後の記録であり、信憑性に疑問があったためか注目されてこなかったが、次の理由から注目すべき記録と考えられる。 ・記述が具体的で8人の子孫も現存する ・年代的に出羽国に諸国から柵戸が移配された時期と符号する ・雄勝柵（羽後町西馬音内）と城輪柵の最短ルート上にある
719	養老3年	東海・東山・北陸道の諸国から出羽国に柵戸200戸を移配	「続日本記」	
733	天平5年	出羽柵を秋田高清水に移転、雄勝建郡	「続日本記」	秋田柵へは船による海路利用が定説、後に海岸沿いの陸路を開設。 雄勝健郡は命令のみで実際の建郡は26年後の天平宝字3年とする学説あり。 雄勝柵へのルートは定説がないが、最上川−鮭川−院内、海路−子吉川−石沢川、日向川−子吉川の各ルートが考えられている。
737	天平9年	多賀柵（陸奥国府）から出羽柵（秋田）へ雄勝村経由で連絡路を開設しようとするが、比羅保許山（金山町付近？）までで中断	「続日本記」	
757	天平宝字元年	雄勝城造営開始	「続日本記」	
759	天平宝字3年	出羽国に雄勝・平鹿2郡を始置 多賀柵（陸奥国府）から出羽柵（秋田）へ雄勝村経由で連絡路開設	「続日本記」	雄勝柵もこの時に置かれたとする学説あり。雄勝柵は当初、羽後町西馬音内足田に置かれ、その後横手市払田に移転したとの学説あり。 出羽国に玉野・避翼・平戈・横河・雄勝・助河の6駅、陸奥国に嶺基駅を置いた。
770	宝亀初年	秋田城停廃	「続日本記」	
780	宝亀11年	秋田城復活	「続日本記」	

2. 百宅を開いた目的は何か？

それでは、庄内地方から鳥海山の尾根を越えて百宅を開き定住したのは何が目的だったのだろうか？その目的は雄勝柵開設のための陸路の開発と宿場の設置ではないだろうかと考えられます。その理由は次のとおりです。

(1)出羽国府は酒田市城輪柵とするのが定説である。雄勝郡の位置は特定されていないが、当初西馬音内にあったのではないかとする説がある。雄勝郡に勢力を拡大するためには交通路の確保が不可欠である。

(2)天平5年（733年）出羽柵を酒田市から秋田市高清水に移転、同時に雄勝建郡。出羽国府（酒田）から出羽柵（秋田）への交通は、海路又は沿岸ルートを利用したと考えられている。一方、出羽国府（酒田）から雄勝柵（羽後町西馬音内）への交通は①子吉川～石沢川ルート、②最上川～鮭川ルート、など諸説あるが定説はなく、最短は峰越ルート（出羽国府（酒田）～升田～鍋倉峠～百宅～笹子峠～立石峠～西馬音内）である。

(3)【資料－2】に示すとおり、酒田市升田から羽後町西馬音内までほぼ直線で61キロメートル、そのちょうど中間に百宅がある。百宅は地形・地質・水、などの条件から人が定住できる条件を備えた子吉川最上流の地である。

また、当時の宿場間の距離は、出羽国府（酒田）～象潟～由利～川辺～秋田城などに見られるように概ね30キロメートル以下となっており、徒歩（5キロメートル／時）で約6時間の距離である。升田を朝出発し百宅で一泊、翌日の夕方には西馬音内に到着する。

(4)当時の飽海郡は鳥海山を中心とし、庄内側の飽海郡と秋田県側の本荘市・由利郡を併せた広大な範囲であった。峰越ルートはこの広大な飽海郡を掌握する重要な内陸ルートと考えられる。また、雄勝郡は飽海郡に隣接しており、出羽国府から峰越ルートを通り、直接的に人・情報・物資などが送られたと考えられる。

なお、「御領分中覚書」宝暦6年（1756年）には馬の往来も可能な道が百宅～升田に整備されていると記録されている。

(5)百宅の開基は全国の諸国から集められた8人によるとされていること、その中に宮廷に仕える土木・建築・造園等を業とする工匠である「内匠」が含まれていることなどから、この事業は大和朝廷の政策として取り組まれたものであったと考えられる。

【資料-2】出羽国府（城輪）から雄勝柵（足田）への経路（内陸ルート）

注：図中の数値は標高

(6)当時、この地域はまさに原生林であり、峰越ルートや百宅もまたしかりであっただろう。厳しい気象条件下でこれを切り拓くことは極めて困難な作業であったことが推測され、当時数百戸単位で全国諸国から出羽柵に移配された柵戸がこのような作業に従事したものと考えられる。人、資金、食糧、物資など、いずれにしても国家という強大な権力がなければ到底なし得ない大事業であったと考えられる。

3. 百宅の地名

百宅の地名については「御領分中覚書」に「柴笹村（しばささむら）大師百宅と名付け給う」とあり、弘法大師が名付けたといわれています。

弘法大師がこの地を訪れたのは弘仁12年（821年）といわれておりますが、この時代の空海（弘法大師）の足跡を見ると、高雄山寺住職と東大寺別当を兼務しながら高野山の造営（816年）に取り掛かり、さらには満濃池の築造（821年～）、東寺講堂・五重塔建立（823年）にも取り組んでいます。空海としてはおそらく人生で最も多忙を極めた時期ではないだろうかと推察され、このような時期に果たして、空海自らがはるばる出羽の国まで出かけてくることが可能であったか疑問が残ります。

ところで、百宅を開基した一人とされる内匠（宮廷に所属する工匠）が百済からの渡来人であったとしたらどうでしょうか？百済人宅がある地「百宅」との説も成り立つのではないでしょうか。

この時代、百済をはじめとする朝鮮半島からの渡来人は日本においてどのような存在であったのか、様々な研究成果から古代の律令国家の形成に多大な役割を果たしていたことが理解できます。

百済は660年新羅との戦いに敗れ滅亡しましたが、その再興をかけて663年に有名な白村江の戦いがありました。大和朝廷は百済に援軍を派兵しましたが、新羅と唐の連合軍に敗退しました。その結果、百済王族は捕らえられ処刑されましたが、多くの百済人が日本に渡来し、大陸の最先端の技術や政治、軍事、法制度、文化などを伝えました。

当時の大和朝廷は、百済滅亡以前に受け入れていた百済の王子（善光／人質と推測されている）に「百済王（クダラノコニキシ）」の姓を名乗らせ、百済をはじめとする渡来人を丁重に扱うとともに冠位や主要な官職、土地などを与え重用し、国の近代化のために大陸の最先端の技術、文化、制度等を積極的に取り入れたとされています。

また、第50代桓武天皇［天王元年（781年）～延暦25年（806年）］の生母は百済系渡来人であることも周知の史実です。

地方においても百済人が活躍したとの多くの記録が残されています。【資料－3】に示すとおり、陸奥国、出羽国で主要な官職に就任した

百済王氏は、敬福（738年陸奥介、743年陸奥守）、三忠（760年出羽介、763年出羽守）、文鏡（766年出羽守）武鏡（774年出羽守）、俊哲（780年鎮守副将軍、787年鎮守将軍、791年征夷副使）、英孫（785年出羽守・鎮守副将軍）、聡哲（797年出羽守）、教雲（804年征夷副将軍）、教俊（808年陸奥介・鎮守将軍、812年出羽守）が記録されており、特に出羽国で活躍した者が多いのが特筆されます。

当時建立された奈良の大仏も百済系の技術者である国中公麻呂が指導したとされ、使用された金箔は陸奥の国から産出された金を敬福が朝廷に献上したものとされております。また、東北の蝦夷を平定したといわれている征夷大将軍の「坂上田村麻呂」も百済系渡来人でありました。

前述のとおり陸奥国、出羽国に大和朝廷が多くの百済王族を長として派遣しました。その理由として、①陸奥・出羽は蝦夷が支配する未開の地であり、律令国家を形成するために全国から柵戸を大量に移配し、この柵戸に多くの渡来人が含まれていた可能性がある、②渡来人は柵戸として入植することにより新天地を与えられ、軍事、農業、建設、法制度、文化等の最先端の知識や技術を国づくりのために如何なく発揮することができた、③これらの渡来人を含む柵戸を統治し、新たな国づくりを進めるのに百済王族が最適であった、などが考えられます。

このころの時代背景を考えると、百宅を開基したとされる8人に「内匠其子太兵衛」なる人物が含まれており、この者が百済からの渡来人でリーダー的存在であったのではないかとも考えられます。また、内匠以外にも渡来人が含まれていた可能性もあります。だとすれば、「百宅」の地名は「百済人宅」からきているとの考えも成り立ち、一概にこれを否定できるものではないと思われます。

当時、蝦夷が支配し辺境の地とされていた出羽の国が日本の政治の中枢（大和）と直結し、中国や朝鮮を経由して世界の最先端の技術、軍事、法制度、文化等が伝えられていたことを想像したとき、古代出羽国の人々の世界観が見えてくるような気がします。

【資料-3】東北（陸奥国、出羽国）で活躍した百済王氏

時代		百済王氏	官職
西暦	和暦		
738	天平10年	敬福	陸奥介
743	天平15年	敬福	陸奥守 [天平勝宝元年(749年) 黄金900両貢進]
760	天平宝字4年	三忠	出羽介
763	天平宝字7年	三忠	出羽守
766	天平神護2年	文鏡	出羽守
774	宝亀5年	武鏡	出羽守
780	宝亀11年	俊哲	鎮守副将軍
785	延暦4年	英孫	出羽守・ 鎮守副将軍
787	延暦6年	俊哲	鎮守将軍
791	延暦10年	俊哲	征夷副使・ 鎮守将軍
797	延暦16年	聡哲	出羽守
804	延暦23年	教雲	征夷福将軍
808	大同3年	教俊	陸奥介・鎮守将軍
812	弘仁3年	教俊	出羽守

※参考資料：「百済王氏の東北補任」山下剛司

4. まとめ

以上のとおり、百宅の開基について限られた資料により歴史的な考察を試みました。その結果は前述のとおり、百宅の開基は出羽建国直後の養老元年（717年）ごろに遡ると考えることができます。その根拠は、百宅が諸国から来た8人により開基されたとの言い伝えの記録「「御領分中覚書」宝暦6年（1756年）」の存在です。この記録の信憑性が問題となりますが、その当時、和銅5年（712年）出羽建国、和銅七年（714年）諸国から出羽国に柵戸200戸移配、霊亀2年（716年）諸国から出羽国に柵戸400戸移配、などの出来事があったことを「御領分中覚書」の記録者が認識していたとは考えにくいことから、百宅の言い伝えをそのまま記録したものと考えられます。これらの記述を当時の時代背景と重ね合わせると矛盾することなく見事に符合することから、それなりに信憑性が高いのではないかと思われます。

はるばる鳥海山の尾根を越えて、気象や自然条件等の厳しい百宅を切り拓き定住した目的は、雄物川上流域の豊かな土地（雄勝・横手盆地）に大和朝廷が支配権を拡大するため、すなわちその前線基地となる雄勝柵の設営のための宿場の設置だと考えると、百宅を開基した8人が全国の諸国から選抜されていること、その中に宮廷に仕える内匠と称する重要な人物が含まれていること、強大な国家権力を要する大事業であったこと、などの事柄のすべてが見事に説明できます。

また、当時の時代背景から、この内匠が百済人であったとしたら「百宅」の地名は「百済人宅」からきているのではないかとも考えられます。

当時の状況を想像すると、狩猟などを営む先住民を道先案内人としてルートを開発したのではないでしょうか。実際、マタギは地図も持たず経験と記憶を頼りに広大な山中を自由に往来し狩猟しています。おそらく、日向川を遡り、ブナ林を通り、鳥海山の峰を越え、子吉川を下る、最短のルートを熟知していたのではないでしょうか。

移動するだけであれば比較的容易であったと思われますが、百宅に定住するとなると相当な困難があったと考えられます。運搬路の整備、物資・食糧等の運搬、原野の開墾等、多くの労力と物資、資金を必要とし、国家権力がなければ困難な事業であったと考えられます。

また、当時の出羽国において、この地域は飽海郡として現在の山形県飽海郡から秋田県由利本荘市をあわせた広大な郡域となっていました。この郡を掌握するうえでも沿岸ルートと内陸ルート（峰越ルート）は重要な役割を果たしていたのではないでしょうか。

以上、百宅の開基について歴史的に考察してみましたが、これまでにない新たな見解も述べております。様々なご批判やご意見などをお寄せいただければ幸いです。

また、鳥海ダムの建設により移転にご協力いただきました百宅の皆様に感謝の心を込めて、故郷である百宅の歴史を考える上での参考にしていただければ幸いです。

令和6年1月

文責／元鳥海ダム調査事務所長　金内 剛